

平成22年度 月曜一限 22代文学演22 (日吉盛幸先生担当)

卷二一・八八歌考

○四一―二一四 村22恵22子

発表日 平成22年七月一〇日

於 二〇四三八教室

【はじめに】

昨年度の講読演習では、磐姫皇后歌群(巻二・八五―九〇歌)を概観した。
今回は、磐姫皇后歌群中、最も評価が高いながらも、現在なお決着がつかず、議論の残る表現を有する八八歌について考察する。

【磐姫皇后】

〈表記〉

・石之日売命(『記』)、磐之媛命(『紀』)

〈系譜〉

・葛城襲津彦(葛城曾都毘古)の女

・仁徳天皇の皇后

・初の民間人皇后妃

・履中、反正、允恭の三天皇の母

〈その他〉

・万葉最古の歌人：伝説上の人物、磐姫皇后歌群は伝誦歌群、仮託されたもの

・三四二(仁徳三〇)年 仁徳が八田皇女(八田若郎女『記』)を后として宮中に

召し入れたのを恨み、山背筒城に隠れる(『記』下巻)

↓「嫉妬の女人」

・三四七(仁徳三五)年 筒城で崩(『紀』)

【語釈・考察】

八八 秋田之 穂上尔霧相 朝霞 何時邊乃方二 我戀将レ息

(秋の田の 穂の上に霧らふ 朝霞 何時邊の方に 我が戀やまむ)

●穂上尔霧相

・四段動詞「霧る」+反復・継続の接尾語「フ」、「立ち込める」の意

・作者は持統朝の柿本人麻呂か：「霧」を人間の悲しみや儂さをいうための素材と

(『釋注』) した最初の歌人：二一七歌

●朝霞

・朝霧

・上代では、大体の区別はあるが、春霞、秋霧とは固定されていなかった

秋の霞：一五二八歌

●何時邊乃方二

①時間と空間（方向）と捉える説

・『代匠記』

「邊ノ方とは、渺々と見え渡る田の、其かたはらなり」↓霧の消え果てる所

「霞は、かたへに晴行くこともあるを、いつか、我もその如く、胸の晴れて、戀の止まんぞとなり」

「端」の意で自立して用いられる「邊」↓単独で「へ」を用いる例は限られる

（土橋 寛『磐姫皇后の歌』の再検討』『土橋寛論文集 上』）

・『注釋』

「霧」⇨沖の譬え⇨「邊」⇨陸…二二〇歌

恋のさ中⇨ 恋のはつるところ

・寺川真知夫「磐姫皇后の相聞歌」『セミナー 初期万葉の歌人と作品

第一卷 初期万葉の歌人たち』

「古代飛鳥の秋の朝霧の具体的なイメージを意識しつつ表現されたのではないか。…霧の晴れていくさまは時間と空間の両面からとらえるのである。」

・『古典全集』

「イツへはイツに、ぐるの意の接尾語へがついた形。カタは方向を表わす。

いつどちらにという時間性と空間性とが重ね合わされている。」

②空間（方向）と捉える説

・『考』

・『古典体系』

・『万葉集歌人事典』

「下句の「いつへの方」は、「いつ」という時間的な意味と解するよりも、

「どちらの方向」と空間的な意味ととる方が朝霞の実体に即した正しい解釈と
考えられる。」

③時間と捉える説

・野中春水『何時邊乃方』考『万葉』八

一、「我が戀やまむ」という句には必ず時間の概念が関係する…二六〇五歌

二、前三首には再会（時間的経過）を期待する心境が説かれている

三、集中「何時」と書かれたものは常に「イツ」と訓む時間的なもの…八〇二歌

「邊」⇨「ゆふべ」／「方」⇨「明け方」…一二二五歌

・『古典集成』

「いつへの方 いつになつたらという目処を言う。「方」は時間的な終着点を意識した表現。」

・『釋注』

「「いつへ」はいつ頃。「方」は時間的な終着点を意識した語と思われる。」

・『新編全集』

「「へ」は頃の意。周辺の意から時間上に転用した。カタもここは時間的に用いてくる。」

・『新体系』

●何時邊乃方二 続き

◎私見：①時間と空間（方向）の双方と捉える説

「霧」⇨仁徳天皇に会えない物理的要因、悲しみ、逡巡する想い

↓「秋田」・「穂」⇨仁徳天皇、「霧」⇨磐姫皇后

自然のものを人に譬える：一五〇〇歌

●我戀将息

・「戀」、「戀ふ」が第一人称代名詞を上を求める時は、ア系統の訓み

・ヤムと訓む「息」：一〇一二歌

○序詞

八八 秋田之 穂上尔霧相 朝霞 何時邊乃方二 我戀将レ息

・上田説夫 『万葉序詞の研究』

序詞

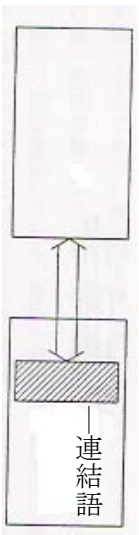
心情部

〈序詞観〉

・連結語を含む心情部と呼応

↓×序詞の「かかる語」

○序詞と心情部を「繋ぐ語」



「…連結語を序歌に不可欠の要素と見なさないのである。連結語を有さない心情部表現があっても、そのことによつて序歌であることと条件を失うものではない。…序歌であることと基本的条件は、連結語の有無ではなく、「物」と「心」との対応構造を有しているかいないかなのである。」

・稲岡耕二「万葉集の抒情の方法」『万葉集の作品と方法』

「序詞を直接に受けるわたり詞」をもたない特徴を持つ例

・土橋 寛 前掲「磐姫皇后の歌の再検討」

仲立の詞をもたない序詞はない

↓「何時邊乃方二」の表現を、時間ではなく、方角と解したために生じた問題

霧⇨恋の融和的表現・象徴的表現⇨用例主義では超えることのできない表現

・寺川真知夫 前掲「磐姫皇后の相聞歌」

立つ、棚引くと結びつく「雲」…「八雲立つ出雲」↓「いづ」

立つ、棚引くと結びつく「霧」…「いづ」↓「何時」

「単純に一般的な序詞と認定しつつ、時間とかかわらせて理解できるかとも思われる。」

・『全注』、『新考』

上三句を序詞とみなす

・『私注』、『釋注』

上三句を下二句の心情の譬喩とみなす

◎私見：上三句は連結語を持たない序詞とみなす

八八（大意） 秋の田の 稲穂の上に立ちこめる 朝霧のように
一体どこまで続きいつになったら 私の恋は止むのでしょうか

【おわりに・まとめ】

昨年度の磐姫皇后歌群の概観は、ひどく荒削りなものだった。今回の考察は、一首を中心据え、分かりやすいものになるように努めた。

現時点では、「何時邊乃方二」を時間的・空間的に捉え、全ては例外あってこそ、上田説夫氏の主張を採り、八八歌は上三句が連結語を持たない序歌であるという結論に達した。

【参考文献・引用文献一覧】

- ・青木生子・井出 至・伊藤 博・清水克彦・橋本四郎（校注）
 - 『新潮日本古典集成 萬葉集一』 一九七六年 新潮社
 - ・伊藤 博 『萬葉集釋注 一』 一九九五年 集英社
 - ・稲岡耕二 『萬葉集全注 卷第二』 一九八五年 有斐閣
 - ・井上通泰 『萬葉集新考 第一』 一九二八年 國民圖書株式會社
 - ・上田説夫 『万葉序詞の研究』 一九八三年 桜楓社
 - ・大久間喜一郎・森 淳司・針原孝之（編）『万葉集歌人事典』 一九八二年 雄山閣
 - ・澤瀉久孝 『萬葉集注釋 卷第二』 一九五八年 中央公論社
 - ・契沖（著）・木村正辞（校訂）
 - 『萬葉集代匠記 自卷一至卷四』 一九二五年 早稲田大學出版部
 - ・小島憲之・木下正俊・佐竹昭広
 - 『日本古典文学全集2 萬葉集一』 一九七一年 小学館
 - ・小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・藏中 進・毛利正守（校注・訳者）
 - 『新編日本古典文学全集3 日本書紀②』 一九九六年 小学館
 - ・佐竹昭広・木下正俊・小島憲之（共著）
 - 『補訂版 萬葉集 本文篇』 一九九八年 塙書房
 - ・佐竹昭広・山田秀雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之
 - 『新日本古典文学大系1 萬葉集一』 一九九九年 岩波書店
 - ・高木市之助・五味智英・大野 晋
 - 『日本古典文学大系4 萬葉集一』 一九五七年 岩波書店
 - ・土屋文明 『萬葉集私注』 一九八二年 筑摩書房
 - ・寺川真知夫 「磐姫皇后の相聞歌」
 - 神野志隆光・坂本信幸
 - 『セミナー 万葉の歌人と作品 第一卷 初期万葉の歌人たち』所収
 - 一九九九年 和泉書院
- ・中西 進（編） 『万葉集事典 万葉集 全訳注原文付 別巻』
 - 一九八五年 講談社
- ・山口佳紀・神野志隆光（校注・訳者）
 - 『新編日本古典文学全集1 古事記』 一九九七年 小学館